

第5章

被災者の気持ちを支えた さまざまな支援

ボランティアの活動は、ガレキの撤去など屋外作業にとどまらず、応急仮設住宅での生活を余儀なくされた被災者に寄り添う、サロン活動や集会所でのイベントなど、さまざまな展開を見せた。コミュニティーの再生を願ったこれらの活動とその変化を紹介しよう。

- 5.1 避難所生活から応急仮設住宅へ
- 5.2 子どもたちの笑顔が見たくて
- 5.3 コミュニティーの再生をめざして
- 5.4 支援活動の変化の記録

5.1 避難所生活から応急仮設住宅へ

5.1.1 避難所生活と支援

震災後、七ヶ浜町内に設けられた避難所の数は、最大で 36 か所に上った。

避難者数は、最多時で 6,143 人。中でも国際村避難所と中央公民館避難所は、最後まで避難所運営を続け、発災 3 か月を過ぎた平成 23（2011）年 6 月 20 日に、最後の避難者を応急仮設住宅へと見送った。

避難所運営は、役場や地域住民によって自主的に行われたが、避難所においても全国から駆け付けたボランティアたちは、幅広い活動を展開した。その活動は、被災者の体のケアから心のケアにまでに至り、さらには、家族同様に大切にしているペットまでもが支援の対象となった。

突然の大惨事に遭遇し、生きる希望さえ失せる状況の中で避難所運営に携わったボランティアの力とその熱き思いは、「崇高」とさえいえる。



5.1.2 仮設住宅集会所での支援活動の開始

徐々にライフラインが復旧し、応急仮設住宅の建設も進んで、緊急避難所で不便な生活を強いられていた被災者たちもそれぞれ仮設住宅に移転した。厳しい環境ながら、曲がりなりにも日常の生活をスタートさせていったのである。

町内の応急仮設住宅は、

1. 第一スポーツ広場
2. 七ヶ浜中学校第 2 グラウンド
3. 生涯学習センター前
4. 湊浜旧町営住宅跡地
5. 松ヶ浜謡児童遊園
6. 社会福祉協議会事務所下
7. 七ヶ浜国際村第 2 駐車場

の計 7 か所に建設され、平成 23（2011）年 5 月 8 日から順次入居が始まった。



6 月 18 日の時点で、完成戸数 421 戸、入居戸数 396 戸、入居者数 1,285 人の被災者が仮住まいを余儀なくされ、平成 25 年 12 月 31 日時点でも、357 戸、843 人が応急仮設住宅で生活を営んでいる。なお、いわゆる見なし仮設居住者は同時点で、188 戸、578 人におよぶ。

震災で家が全壊し、今まで積み上げてきた暮らしがすべてなくなり、仮設住宅での生活を

余儀なくされた方たちがいる。また、さまざまな地区から集まった住民との共同生活という
なれない暮らしに、引きこもりがちになる方たちもいる。このような方たちが、決して孤立
することがないように、災害ボランティアセンターでは、NPO 法人・レスキューストックヤードとともに、集会所でのコミュニケーション作りをスタートさせた。

始まりは「集会所喫茶」の活動からだった。これは、仮設住宅に設けられた集会所にボランティアを駐在させ、集まってくる住民とお茶を飲んだり話を聞いたりするというもので、「傾聴ボランティア」とも呼んでいた。いまだ瓦礫撤去の作業も膨大に残る状況の中で、この傾聴ボランティアとともに、集会所でさまざまなイベントを展開する「集会所イベントボランティア」も募集して、必要に応じて各集会所に派遣することにした。

この活動には、「七ヶ浜町ボランティア友の会」ならびに、町内のボランティアサークル「結の会」も活動に参加した。その後、住民の自立と共に「傾聴ボランティア」は平成 24 (2012) 年 12 月をもって終了したが、「おらほのサロン」と称してボランティアセンターが独自のサロン活動を展開、また、心の支援として「集会所イベントボランティア」を継続して募集し、現在に至っている。

集会所における支援は、「人のつながりが心の支えになること」、また「会話から少しでも被災者が元気になるば……」との思いからの支援であることは、いうまでもない。

5.1.3 「浜を元気に！ 七ヶ浜町復興支援ボランティアセンター」に改称

発災から 1 年たっても、まだ住宅や田畑に残る瓦礫の撤去作業は続いていた。しかし、総じてボランティア活動の目的が復旧から復興へと移ってきたのも事実である。

そのような変化を反映して、他町村のボランティアセンターでは、その名称から「災害」の文字を外し、「復興支援」という冠名を用いるようになってきた。

七ヶ浜町災害ボランティアセンターも、震災からちょうど 1 年を迎えた平成 24 (2012) 年 3 月 11 日、名称を「浜を元気に！ 七ヶ浜町復興支援ボランティアセンター」と変更した。

「浜を元気に！」には携わった多くのボランティアやスタッフの想いが込められている。それは町、浜、そして住民が、少しでも元気になれるように、前に進む力が出るようにとの思いからだ。こうして発災 2 年目に入り、被災者への「元気がでる心の支援」が本格的にスタートした。ここからは、仮設住宅の集会所やボランティアセンター内で催されたサロン活動を中心に、被災者の気持ちを支えるさまざまな支援を紹介していこう。



5.2 子どもたちの笑顔が見たくて

5.2.1 災害と子ども

災害発生当時、大人と同様に子どもたちにも大きなストレス負荷が発生していた。

家財を失い途方に暮れる大人たちの様子は子どもたちにも伝わり影響を及ぼす。避難所という空間の中で子どもたちは本来の元気な姿を失い、笑顔も見られなくなった。

初期においては町内の託児機能も低下していたため、特定非営利活動法人レスキューストックヤードは避難所の隣に設置した「ボランティアきずな館」にキッズルームを設けた。

子どもたちをボランティアが見守り、母親はその間に一息をつく。子どもたちにとっては走り回ることも、大声を出すこともできない抑圧された状況から解放され、子どもらしさを取り戻すことができる。母親は1日中子どもを見ていなければならない緊張状態から解放されリラックスできる。

日常では当たり前であったことが災害時には失われ、その時間が長引けば長引くほどストレスが溜まり、心身の不調となって現れる。

親の不安定さが子どもへ影響を与えることも多いことから、子どもだけでなく「親子」を支援対象と位置付け取り組んだ。



キッズルームにて「3匹のこぶた」のボランティアと遊ぶ子どもたち。(2011年5月2日)

《子どもたちはその時 ①》

この事を一生忘れないで生きたい

当日、春休み前の大掃除が終わり反省会をしていた時に地震がきました。

地震がおきた時は、ビックリして、あわてました。その時、近くに先生がいて安全なところに移動して、地震がおさまるのを待って、校庭に避難して、他のクラスメイトと合流しました。クラスメイトと合流し、安心する事ができました。少しして、おばあちゃんが迎えにきてくれました。その時に、がれきが見えました。がれきを見た時、私は何も考える事ができませんでした。夜は、食欲がなく、時間の感覚がなくなり眠れませんでした。

朝になり、親戚の家に行きました。親戚の家の近所の方が、差し入れを持ってきてくれて、とてもうれしかったし、助かりました。この震災で、私は今までの生活がいかに幸せだったかがよくわかりました。

この事を一生忘れないで生きたいです。

渡辺ももか（小学4年生・発災時）

5.2.2 レスキューストックヤードの子ども支援

◆ つながる遊び庭こどもアートしちがはま

2011年7月からは、七ヶ浜町親子支援プログラム「つながる遊び庭こどもアートしちがはま」として、月に1度プログラムを継続した。なお、イベントの開催にあたっては、以下の団体の協力をいただいた。

・協力団体

- ・未来予想図実行委員会
- ・海の学校
- ・子育て支援センター
- ・3匹のこぶた
- ・ここねっと
- ・LUSH ジャパン
- ・一歩スマイルプロジェクト
- ・東北学院大学災害ボランティアステーション



アロマオイルをつかった虫除けスプレーづくり(2011年8月5日)。

・活動一覧

・2011年7月3日 音のワークショップ「感・音・即・興」(中央公民館)

打楽器と声の独創楽団「ラビラビ」の皆さんによる音のワークショップ。みんな音楽がなると勝手に身体が動いてしまう不思議な空間ができあがった。子どもから大人まですごく楽しそうだった。

・2011年8月5日 アロマオイルで虫除けスプレー作り(中央公民館)

ラベンダーなどの精油ベースで水を混ぜて作る手作り虫除けスプレー。アロマオイルのいい香りが部屋いっぱいに広がり、会場はリラックスした雰囲気になった。

・2011年9月19日 デザインハンカチ作り(中央公民館)

ブラザー工業株式会社の書いた絵をそのまま布に転写できるプリンターを使用。スリランカ、フランスなどから届いていた現地の子どもたちが書いた絵が200点展示された。絵を書いた後は子どもたちが児童館の先生たちと遊んだ。その間、お母さんは「LUSH ジャパン」さんのマッサージ。できたハンカチは数カ月後お届けした。

・2011年10月13日 芋煮会、ハンドマッサージ(ボランティアきずな館前)

「子育て支援センター」さんとの連動企画。外で焼き芋をしたあと、お絵かきや輪投げ、シャボン玉で子どもたちは遊んで、お母さんたちはLUSHによるハンドマッサージ、その後に「三匹の子ぶた」さんによる芋煮会があった。参加者は親子あわせて70名程。

・2011年11月23日 キャンドル作り、詩の会（中央公民館）

キャンドル作りをしてその後に、「たゆたう」さんの唄の会が開かれた。参加者は20名程。

・2011年12月23日 「HappySmile 未来教室」（子育て支援センター）

「海の学校」、「未来予想図実行委員会」と「レスキューストックヤード」主催で子どもたちの未来への希望をテーマにお祭りが開かれた。たくさんの団体がワークショップ形式に出店。参加者は70名程。

・2012年1月22日 フォトフレーム作り（七の市商店街）

「七の市・大売出し」連動企画。100均ショップで買ってきたフォトフレームにフェルトやビーズなどで好きなようにデザインしてオリジナルフォトフレームを作成。30人程参加。

・2012年2月28日 吊るし雛作り（子育て支援センター）

「未来予想図実行委員会」の持ち込み企画。小さなお子さんでも簡単に作れる吊るし雛作り。子どもたちは地元東北の大学生たちと遊んでいるなか、お母さんたちは「LUSH」さんのハンドマッサージを受けた。80人程参加。

・2012年3月25日 スライム作り（七の市商店街）

「七の市・大売出し」連動企画。原案は遊びに来ている子どもたち。絵の具やビーズでアレンジしながらオリジナルスライムを作っていた。参加者は60名程。

・2012年5月24日 母の日 エコバック作り（子育て支援センター）

「未来予想図実行委員会」の持ち込み企画。筆を使わず、フォンガーペイントで作った。24名参加。

・2012年6月7日、父の日 飛び出すメッセージカード作り（子育て支援センター）

「未来予想図実行委員会」の持ち込み企画。22名参加。



子育て支援センターにてエコバッグに子どもの足型をとるお母さん(2012年5月24日)。

・2012年12月21日 子育て支援センタークリスマス会（子育て支援センター）

「未来予想図実行委員会」の持ち込み企画。まっぼっくりと羊毛でクリスマスオーナメント作った。60名参加。

・2012年1月15日 お餅つき大会（子育て支援センター）

まゆ玉団子作りとお餅つき。10名参加。

- ・2012年2月22日 木粘土でお雛様作り（子育て支援センター）

40名参加。

- ・2012年3月22日 お楽しみ会（子育て支援センター）

親子写真撮影会、フォトフレーム作り、巨大カステラ作り。50名参加

- ・12月24日「サンタが家にやってきた」※2011年度、2012年度

毎年行なっている行事で、未就学児童のところへサンタに変装した七ヶ浜町の人々がプレゼントを配る。今回は仮設住宅の小学生の子たち、在宅の未就学の子たちにもプレゼントを配った。「社会福祉協議会」、「七ヶ浜町ボランティアセンター」、「NPO アクアゆめクラブ」、「愛知生協」などが協力。

＜特定非営利活動法人レスキューストックヤード 石井良規＞

《子どもたちはその時 ②》

力を合わせて一歩ずつ前へ

あの時、私たちは、まだ小学4年生でした。大きい地震、津波。なにが起こったのかも分からない状況でした。高台にある小学校で授業を受けている最中でした。一瞬にして目の前が真っ暗になり、外は雪が降っていました。そんな中、体育館に避難をしましたが、余震が多く、ビクビク震えていました。

私の家族は、おじいちゃん、おばあちゃん、お兄ちゃん、お姉ちゃん、飼っていた犬が行方不明で、お母さんは仕事、お父さんは福島原発四号機にいるなど、迎えにこれる人がいなかったのので、体育館で1人、不安になりながら長い長い一晚を過ごしました。

次の日に、朝早くお父さんが福島から10時間かけて帰ってきてくれて、おじいちゃんやおばあちゃん、お兄ちゃん、お姉ちゃん、犬も、家の後ろにある山から無事に見つかりホッとしていた時に、家が流されたことを聞きました。嘘でしょ？と思いました。みんなの真剣な表情を見て「本当なんだ」と実感しました。母屋の隣に新しく建てたばかりで、まだ三ヶ月しか経っていませんでした。津波に襲われた七ヶ浜の風景と、壊れた家を見たときは、なんにも考えることができなく、泣くことしかできませんでした。

現在は、がれきも少しずつ減っていき、町民の皆さんも、他県などから来てくださったボランティアの皆さんのおかげで、明るく笑顔で1日1日を過ごしています。今もまだ復興していないところもありますが、この大好きな七ヶ浜の町民のみなで力を合わせて、一歩ずつ前へ進んでいきたいと思っています。

鈴木彩可（小学4年生・発災時）

5.2.3 子どもたちを支えたいろいろな活動

◆ 遊び場作りと遠藤剛さんらのサッカー講習

津波により、家を流され、避難所生活を余儀なくされた子ども達。また、どうにか家は残ったものの、遊び場だった公園が「仮設住宅」建設予定地となってしまった子どもたち。震災によって、これまでのように公園に集まる子ども達の笑い声を聞くことは、できなくなってしまった。

そんな中「また子ども達が遊べる場所を作ってあげたい……」という思いの若者や、スタッフ、ボランティアさんが「遊び場づくり」を始めた。

平成 23（2011）年 4 月下旬、中央公民館下の相撲場脇にあるローラースケート場で、「遊び場」がスタートした。

最初に担当したのは地元の高校生達であり、避難所にいた子ども達に声を掛けて参加者を募った。そうしているうちに、支援してくれる団体も出てきた。

また、練習場がなくなったサッカー少年たちのために、サッカーのコーチ経験があり、北海道から屋外作業のボランティアに参加していた遠藤剛さん（北海道・作業ボランティア）が中心となって、サッカーの講習会をスタートさせた。この練習は、地元の男子学生（高校生・大学生）がサポートして、5 月初めまで続いた。



手書きの看板作りも地元の高校生が中心に!!



遠藤さんとサッカー少年たち

◆ 吉田晴弥さんらの自転車プロジェクト

「津波で被災した妹の自転車を治したい！」始まりは、お兄ちゃんの愛からスタートした。

その思いを実現してくれたのが吉田晴弥さん（東京在住）ら自転車プロジェクトのメンバーたち。自転車屋さんとそれをサポートするボランティアがガレキの中から子どもたちの自転車を探し出して、子どもたちと一生に修理をした。

また、地元の福祉園にて宇宙陶芸家として活動している吉田さんは、被災した仮設住宅の住民や子どもたちのために、何度も陶芸教室を開催。リピーターとして参加する子どもも増え、彼らの心にあたたかな思いと勇気を与えてくれた。



「僕にもできた」子どもたちも大喜び。右奥が吉田さん。

◆ 「ここねっと」による子どもたちのケア

平成23(2011)年4月からは、佐藤秀明先生が率いる仙台のNPO法人「自閉症ピアリンクセンター ここねっと」が避難所に入り、子どもたちとの交流や遊びを通して、子どもたちが抱える問題を引き出し、精神的なフォローを行った。

活動前と活動後には社協事務所のデイルームにて報告があり、また、新規ボランティアに対しては綿密な打ち合わせをした。打ち合わせには、ボランティアセンターからも、有職者や保育士などを派遣した。

また、学校が始まるころ平成23年5月には、「学童保育」に対しても心のケアとして支援が行われ、重大な問題を抱える子どもたちをしっかりとサポートしていただいた。

◆ コロッケさんらものまね四天王による公演

平成23(2011)年5月、ものまね芸人であるコロッケさん、ツートン青木さん、コージ富田さん、トニー・ヒロタさんのいわゆる「物まね四天王」がボランティアセンターを訪れ、センター内の特設ステージで、すばらしい芸を披露してくださった。



ステージ後はサインと握手を求める人たちで長蛇の列ができた。

これは、コロッケさんサイドからの申し出だった。その際、震災直後にボランティアセンターを支えたのは地元の中高生たちであると伝え、それを受けて子どもたちへの感謝と慰労をかねた催しを開いていただけたことになった。

当日の公演は、子ども達をはじめ避難所の方々への大きな「笑い」のプレゼントになった。久しぶりにみんなでおなかを抱えて笑ったことが、今でもしっかり記憶に残っている。

◆ 中澤佑二選手らによるサッカーイベント

2011年5月9日、サッカー元日本代表である横浜マリノスの中澤佑二選手らが、七ヶ浜スタジアムで町内のサッカー大好き少年たちを集め、練習や指導を通して交流するイベントが開催された

きっかけは、「七ヶ浜は被害が大きいのにあまりメディアに取り上げてられていない。七ヶ浜の子どもたちを案じている」というマネージャーさんからの言葉だった。



中澤サッカースクールのコーチがリフティングパフォーマンスを子どもたちに披露。

当日は、中澤選手を一目見ようと、子どもだけでなく多くの大人までもが、町内外から駆けつけた。中澤選手らはボランティア達にも声をかけ、一緒に写真におさまるなどして、参加した全員に元気を与えてくれた。さらに、定期的に七ヶ浜を訪れ、子どもたちと触れ合ったほか、農地復興のボランティアとしても活動していただいた。

《子どもたちはその時 ③》

絶対大丈夫、自分だけは大丈夫などありえない

東日本大震災の時、私は4年生の終了式をむかえる前で2日後にひかえた六年生の卒業式のために校舎のそうじをしていました。いつもならもうそろそろ下校している生徒もいる時間だったと思います。

その揺れはいきなり、つきあげるようなゆれですごく長く感じました。

ゆれがおさまり先生がみんなに声かけしてくれて校庭に避難しました。その時外は雪がふってきてあつというまに辺が白くなって寒かったことをおぼえています。

みんなでブルーシートに入って親たちのむかえをまちました。40～50分たったころ母がむかえにきました。その時はもう津波が学校の下におしよせて、海の近くの家々をのみこんでいました。今おこっていることが現実なのか、信じられない思いでみていました。

学校は孤立して、その日からしばらく水がひくまで家に帰ることができなくなりました。

その日の晩だったと思います。仙台港のあたりで爆発がおき黒いけむりと炎が学校からもはつきりみえました。

父は仕事場から帰ってこられず、母と妹、地域の人、あとできいたら800人の人達と体育館で過ごすことになりました。

4日位たって家のあった場所に父と母が行ってきました。その場に私の家はなく前の方にたっていた家がうちのあったところにひしゃげて移動していました。父と母が辺りを見わたすと、大きな道路をこえて海のそばまで私の家の二階部分が流されていました。

あの日の朝まで、私達が過ごしてきた家を、いつもの町の光景を、たくさんの人達の命を一瞬のうちにうばった津波、そんな自然の脅威からのがれることができないのであれば、せめて自分の命や財産は、自分でしっかり守らなければならないと思います。

絶対大丈夫、自分だけは大丈夫などありえない。この震災をこの機会にまた考えさせられました。

私は今日自分がこの場でこんなことを話すことがイヤでたまりません。それは、「震災で家を流されたかわいそうな子」とみなさんに思われていると思うから。

そんな思いを大人の方は子どもに思わせないような対策を、今子どもである人達は、自分で守り、大人になっても災害のことは頭から切りはなさずに災害は必ずあるものと認識してほしいと思います。

小学4年生 横田一步（小学4年生、発災時）

5.3 コミュニティーの再生をめざして

5.3.1 癒しのコンサート・サロン活動の数々

◆「あっちこちの会」カフェコンサート

2011年8月から、応急仮設住宅の集会所や地区の公民分館など2か所で、おもに若手の演奏家によるカフェコンサートが月に1度開催された。

カフェ用のお菓子は神奈川や東京でボランティアを募り100個以上を作成。コンサートの広報は、毎月ポスター10枚、チラシ200枚ほどを印刷し、仮設住宅や町内に配布した。チラシ・デザインは、若手美術家が担当、当日の運営には会を応援している町民の方々も加わっている。



豪華なお菓子の数々。

音楽を聞いたり、楽器に触れたり、一緒に歌ったり、始まる前の淹れたてのコーヒートと手作りのお菓子の、みんなが楽しみにしている時間の始まりとなった。毎月楽しいコンサートタイムである。



踊り出す子どもたち



楽器演奏体験（＾＾）



カフェスタッフ

◆ 幹 miki & 佐藤達哉さんによる七ヶ浜町復興支援ライブ活動

2013 年 1 月、応急仮設住宅の集会所から幹さんの歌声が響き始めた。ピアノの佐藤さんは七ヶ浜町遠山出身のアーティストで、普段は歌手 aiko さんのキーボードとして活躍中である。

震災後、地元で瓦礫撤去のボランティアをしながら音楽でも支援をと、おなじみの蔵王町出身の幹さんと一緒にライブ活動が始まった。



幹 miki & 佐藤達哉さんのライブ(遠山公民分館にて)

毎月 2 か所で素敵な歌声を届けてくれた。

仮設住宅の集会所だけではなく、障害者地域

活動支援センター「あさひ園」や地区の公民分館、特別養護老人ホーム「第二清楽苑」、「七ヶ浜海の宮ディサービスセンター」、ボランティアセンター等、町内のあらゆるところで演奏していただいた。

二人の愉快的トークに加え、幹さんと歌で盛り上げられることもあって、人気の高い楽しい時間となった。平成 26 年も継続して七ヶ浜でライブ活動を展開してくれるとの嬉しい報告もいただいた。

◆ 応急仮設住宅集会所での「おらほのサロン」

被災して、やむを得ず応急仮設住宅での生活を強いられている中で、住み慣れぬ住宅での生活によって被災者住民はストレスを抱えている。

住民の孤立感を解消し、心身の健康を維持し、コミュニケーションの場を再生することを目的として、平成 24 年 3 月、まず「おらほのラジオ体操」で体をほぐしてお茶を飲みましょう、という会を仮設住宅の集会所で開催した。

この試みを定着させるために、お茶飲み会を 4 月より「おらほのサロン」と名付けて定期化することにした。

そうしていうちに、サロン出席者の方々より、何か手を動かして小物を作るようなことがしたいとの要望があった。そこで、平成 25 年 10 月からまずハンドメイドの五円玉フクロウ根付作りが始まった。

これからも住民の要望を聴きながら、住民と共に手作りのサロンを展開していきたい。

＜七ヶ浜町社会福祉協議会 竹中 昇子＞

5.3.2 高山外国人避暑地から広がった海外からの支援活動

◆ 外国人避暑地として七ヶ浜

七ヶ浜町の高山地区には、明治期に仙台に住んだ宣教師によって拓かれた外国人専用の避暑地がある。この高山外国人避暑地は、「山の軽井沢」「湖の野尻湖」と並び、「海の高山」と呼ばれ、日本三大外国人避暑地に数えられている。

表浜に隣接するこの高台の避暑地は、平成 23 (2011) 年 3 月の震災時に、多くの外国人ボランティアを受け入れ、宿泊所として開放した。

◆ ロンドンからの支援

ロンドン在住のアンガス宮地さんは、高山外国人避暑地に常住するウェンディ宮地さんの息子さんである。その関係もあって、彼は震災後に七ヶ浜町を中心として東北の被災地を支援する団体「THE 7-BEACH TSUNAMI AID」を立ち上げた。この団体を中心にロンドンの東北支援活動が大きく展開していった。

◆ THE 7-BEACH TSUNAMI AID の活動

<2011 年>

- ・ Facebook やウェブサイトを利用した情報の発信(英語)
- ・ 物品販売による寄付金集め
- ・ ロンドンの語学学校や小学校で東北の状況を発表
- ・ 被災地の希望を伝える写真展「Yet I Still Dare to Hope」を開催
- ・ 東北訪問(七ヶ浜町、南三陸町、気仙沼市)
- ・ ファンドレイジング チャリティーディナー開催
- ・ クリスマスカードプロジェクト
- ・ Yarn Alive (後述) 支援
- ・ 平井元喜氏(ピアニスト、ロンドン在住)七ヶ浜にてピアノコンサート開催

<2012 年>

- ・ 東日本大震災 1 周年記念式典「You Are Not Forgotten」主催
- ・ スターバックスとの共同イベント



現地の新聞に支援の様子が取り上げられた。



2012 年 3 月、東日本大震災 1 周年記念式典「You Are Not Forgotten」



七ヶ浜、東北被災地のパネル展のようす

- ・物品販売による寄付金集め
- ・在英日本商工会議所のチャリティーディナーで写真展
- ・チャリティークックブックの販売
- ・611days later のパネリスト参加（村井知事ご参列）
- ・Yarn Alive 支援
- ・Cricket for Smiles 支援

<2013 年>

- ・東日本大震災 2 周年記念式典 「一緒に歩こう」 共催
- ・ロンドン勉強会で講演
- ・日本 対 MCC クリケットチャリティーマッチ 共催
- ・物品販売による寄付金集め ・在英日本商工会議所のチャリティーディナーで写真展
- ・ロンドンから被災地を訪問する人への補助金交付
- ・鈴木ナオミ氏（マルチタレント、ロンドン在住） 七ヶ浜にてコンサート

◆ 高山外国人避暑地から発信した「ヤーン・アライブ」（毛糸でイキイキ）

震災前の平成 22（2010）年から、七ヶ浜町ボランティアセンターとの交流を深めていた矢先の災害だった。高山外国人避暑地に常住していたウェンディ・宮地さんとデディ・サーカさんが、応急仮設受託に住む女性達を心配し、「編み物なら心の癒しになるのでは……」と、2011 年 7 月、第 1 スポーツ広場の仮設住宅集会所で「仮設住宅編み物サークル」がスタートした。



仮設の方からの信頼を受けて

このサークルは、サーカさんが関係する NGO「JAPAN ALIVE（ジャパン・アライブ）」の下部組織「YARN ALIVE（ヤーン・アライブ）」として、全国にその活動を発信するようになった。現在メンバーは 100 名近くになり、海外の被災地の子ども達への編み物も支援。その幅広い活動には、全国・全世界から支援の輪が寄せられている。

七ヶ浜ボランティアセンターとの繋がり、震災前からのものだったが、震災後さらに関係は広がり、絆は太くつながった。ここでは、ヤーン・アライブの宮地さんとサーカさんがボランティア情報誌に寄せた活動レポートを原文のまま紹介する。

We will never forget the destruction of the March 11, 2011 tsunami. Although we were very fortunate to experience minimal damage, we saw the devastation that our neighbors experienced and felt the need to help our community in some way. One idea that came to mind was bringing tsunami-affected women of all ages together to learn how to knit and crochet and support one another during the post tsunami recovery. We love to knit and

crochet and felt that many of the women would have lost all their yarn in the tsunami. We could never replace all their lost possessions, but we believed that we could give them new yarn and supplies to help replace some of (what they did lose. We also wanted to give the women in this area something to do with their hands to counteract any suicidal tendencies that may have risen as was seen after the Kobe 1995 earthquake.

We have found that giving the ladies a project to do with their hands has helped alleviate depression and anxiety. Not only has coming together helped counteract loneliness but it has also helped unite women from different areas of Shichigahama who never knew each other before the tsunami. As a result, the concept of gathering together and being able to share one another's stories has brought much healing. On a personal note, being a part of Yarn Alive and the greater community of Shichigahama has been a great joy. We have gained so much from this experience. We have loved making so many new friends from all over Shichigahama. There is always lots of laughter, encouragement, learning new skills from one another and great support. We never knew that a simple idea of knitting and crocheting could have such an impact not only in this community but also in our own lives.

SAWKA, Teddy & MIYAJI, Wendy

<訳>

私達は2011年3月11日の津波での被害を忘れることはありません。私達は最小限の被害しかうけませんでしたので、どうにかして自分達の繋がりを利用して皆さんを助ける必要があると感じました！私が思いついた一つのアイディアは、全年齢の津波の被害を受けた女性を集め、編み方やかぎ針編みの方法を学び、津波後の復興の間、お互いを助け合うものでした。私達は編んだり、かぎ針編みをするのが大好きで、たくさんの女性が津波によって織物用の糸を失ったと感じました。私達は彼女達が失ったすべてのものの代わりをあげることはできませんでしたが、新しい織物用の糸と道具を提供させて頂きました。1995年の神戸の地震の時に起きた自殺願望者の増加のようなことが起きないように、私達はこの場所にいる女性達が手で何かできるものを考えました。

女性たちに手で行なうプロジェクトを提供することは、絶望や不安を緩和するのではないかと考えたからです。集まることは孤独と戦うことを助けただけでなく、津波以前は全く知らなかった七ヶ浜の違う場所に住んでいた人達を繋げることもになりました！結果、一緒に集まることやお互いのお話を共有できたことは大きな癒しをもたらしました！私事ですが、ヤーンアライブ（YARN ALIVE）と七ヶ浜のすばらしいコミュニティーの一員であります。私達はものすごくたくさんの心のプレゼントをこの経験から得ました。私達は新しい友達を七ヶ浜のすべての場所から作ることができました。私達は、編んだり、かぎ針編みをしたりといった単純なアイディアがこのコミュニティーだけでなく私達の生活にまでこれほどの影響を及ぼすとは知りませんでした。いつもたくさんの笑い、励まし、新しい技術をお互いから学ぶこと、そしてすばらしいサポートがあります。

※2013年9月号ボランティア情報誌「ドリー夢」掲載

<七ヶ浜町社会福祉協議会 星 真由美>

5.4 支援活動の変化の記録

5.4.1 仮設住宅の集会所における支援活動はどのように推移していったか？

平成 23 (2011) 年 5 月頃から近隣の市町村や全国各地のボランティアから、仮設住宅に暮らす方々を含め、被災者を支援したいとの申し出や連絡が多数寄せられた。

七ヶ浜町ボランティアセンターではボランティア・コーディネーターのスタッフが、町から委託されて仮設住宅の施設管理をしているサポートセンターのスタッフと連携し、仮設住宅の集会所にさまざまな支援を振り分けコーディネートした。



仮設住宅住民へのニーズの聞き取り調査

入居者世帯数の多い仮設住宅と少世帯数の仮設住宅があり、参加者数は様々だった。



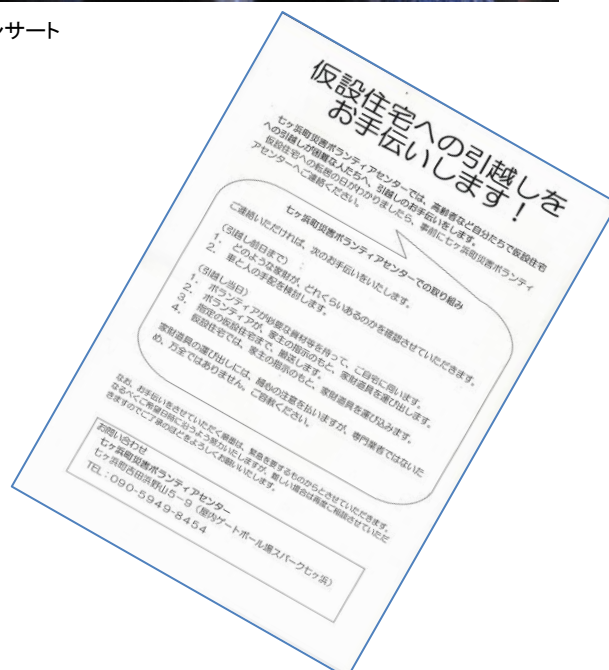
支援物資を仮設住宅に分配するボラ高校生のボランティア



復興支援コンサート



仮設住宅集会所における子ども支援



◆ 仮設住宅の集会所を、住民の居場所として利用していただけるように

また、仮設入居時には引っ越しボランティアのニーズを受けて支援をした。

平成23年度 仮設住宅居住者への支援																											
	子供支援	足湯	歌・音楽	手芸・工作	ストレッチ	マッサージ	引っ越し	理容・美容	環境整備	写真関係	炊き出し	表札作り	点字教室	書道教室	朗読	お茶会	サロン	清掃	針治療	芸能慰問	演芸	園芸	傾聴	ペット配布	健康チェック	セラピー	支援物資
4月	仮設支援6月から始まったので、4月・5月は活動なし																										
5月	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	17
6月	7	11	0	0	0	3	8	1	0	0	10	4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	81	0	0	0	0
7月	1	7	0	3	0	9	2	1	0	2	6	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	124	0	0	0	0
8月	16	4	7	10	0	12	5	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	96	0	0	0	0
9月	20	9	5	10	2	21	4	1	0	0	10	0	0	0	0	0	1	0	0	0	4	0	114	0	0	0	0
10月	0	6	12	16	6	12	1	7	0	0	6	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	0	110	0	1	0	0
11月	5	15	4	8	2	7	1	3	0	0	1	0	0	0	4	0	0	0	0	0	0	0	102	0	2	0	0
12月	9	2	4	16	6	10	1	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	93	0	0	0	0
1月	0	4	1	6	1	7	4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	56	0	0	0	0
2月	2	7	7	12	1	8	4	0	0	7	2	0	0	0	3	0	14	0	0	0	1	0	84	0	5	0	0
3月	1	11	5	7	2	4	0	1	0	6	1	0	0	0	0	0	2	0	0	0	1	0	88	0	0	0	0
合計	61	76	45	88	20	93	30	14	0	15	39	6	0	0	7	0	17	0	0	0	12	0	948	0	8	0	17
平成23年度仮設への支援回数 1,496回																											

5.4.3 平成24(2012)年度 仮設住宅居住者への支援

◆ 多くの生きがいを見出していただけるように

被災 2 年目に入り、仮設住宅居住者のなかから、集会所は自分たちで管理しようという動きが出てきた。その結果として、集会所の清掃は住民の方の当番制になった。また、傾聴を兼ねた待機ボランティアはお断りすることにした。この様に、仮設住宅の被災者にも、くらしを前向きに考える姿勢が目立ってきた。身体を動かす支援も多数開催され、笑いも聞かれるようになり、仲間の輪も広がっていった。

マッサージや足湯の支援は継続され、楽しみに待っている住民が多い。また、体操やストレッチなどさらに手を動かす事で生きがいを見出したり癒しになったりすればと、編み物の材料を提供し教室を定期的で開催する支援を外国女性の方々から頂戴した。初めて毛糸に触れた喜びが楽しみとなり、集会所で語り合いながらいつも編み物をしている人が多く見られるようになった。

仮設住民が一人でも多く生きがいを見出し生活する事を望み、ボランティアセンターでも「おらほのサロン」と称する活動を行なって支援をした。

※おらほ……私の方・私の所の・私の地方といった意味の土地の言葉。

[illegible]

5.4.4 平成25（2013）年度 仮設住宅居住者への支援

◆ 気持ちの格差の解消のために

仮設生活も3年目に入り、自立再建し元の場所に戻る世帯もあれば、新天地で生活を始める世帯など、仮設を退去する世帯が見られるようになった。空いた仮設住宅はそれまで狭いと感じていた人に提供されるなど、少しは広く使用出来るようになった方もいるが、取り残されたと思う住民の声も聞かれるようになった。

集会所のイベントに参加してそんな気持ちを紛らわせていただこうと、支援をおこなった。歌や音楽を提供してくださるボランティアの支援も継続的に行われ、参加者にも定着してきた。歌えなくなっていた「ふるさと」も皆さんと歌えるように変化していった。

書道教室も継続支援され先生の指導の下に、展示会に出展した住民もいた。おらほのサロンの支援活動も定着し、体を動かし、短時間で行える小物づくりに人気があった。

今後、公営住宅や高台移転した時のコミュニケーションづくりにも活かしていきたいと思っている。

平成25年度 仮設住宅居住者への支援																											
	子供支援	足湯	歌・音楽	手芸・工作	ストレッチ	マッサージ	引っ越し	理容・美容	環境整備	写真関係	炊き出し	表札作り	点字教室	書道教室	朗読	お茶会	サロン	清掃	針治療	芸能慰問	演芸	園芸	傾聴	ペット配布	健康チェック	セラピー	支援物資
4月	0	3	5	7	4	1	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	10	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
5月	0	3	5	8	5	4	1	0	0	0	0	0	0	3	0	0	15	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0
6月	1	5	5	7	8	5	0	0	0	0	1	0	0	2	0	0	8	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0
7月	0	5	4	8	5	5	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	8	0	0	0	0	0	0	0	3	0	0
8月	0	5	2	6	4	9	0	0	2	0	0	0	0	2	0	0	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
9月	1	4	6	12	5	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	10	1	0	0	0	0	0	0	1	0	0
10月	0	5	9	9	4	5	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	7	0	0	0	2	0	0	0	0	2	0
11月	2	5	2	11	8	3	0	0	0	0	2	0	0	2	0	0	5	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
12月	1	4	7	6	2	0	1	6	0	0	0	0	0	2	0	0	9	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2
合計	5	39	45	74	45	32	2	6	2	0	3	0	0	18	0	0	75	1	0	0	2	1	0	1	4	2	2
平成25年(12月分まで)支援回数 357回																											

<七ヶ浜町社会福祉協議会 引地淑子>

<Memo>